介護等体験実習に向けて

介護等体験実習を受講したみなさんへ

文学部人間関係学科
准教授　三　城　大　介

講義でもお話させていただきましたが、わたしの専門領域であるソーシャルワークを実践するソーシャルワーカーも教師も広い意味では、同じ対人援助職だと言えます。

人（ある一定の括りを持った対象者、例えば生活に困窮している地域生活者、就学年齢に達した児童）に対して、必要な支援や指導、教育、家族間への介入、環境調整などを生業にしているという視点からみての話です。

先般、新聞やテレビの報道で、小学生の保護者に対し、その担任の教師が損害賠償を求めて民事訴訟を起こすといった報道が流れました。報道は断片的で、訴えられた保護者がインタビューの中で教師の能力の低さや指導の不手際を一方的に罵り、児童には登校時ICレコーダーを持たせている場面だけがデフォルメされた印象を受ける形で報道されていました。わたしにとってはショッキングな報道でした。報道の一場面だけで、ことの総てを判断する事は控えますが、教師が保護者を訴える、もはやそんな時代なのかと感じました。

ここ数年、学校教員が心の病に罹患する割合が他の職種に比べて高いことや、その原因の一つとしてモンスターペアレントの存在などが話題になっています。また、臨床心理士や介護職、ソーシャルワーカーといった対人援助職のバーンアウト率の高さも指摘されています。対人援助者が、生業として支援をし、それに見合った対価を受け取る。援助の内容に瑕疵があったり、援助により損害を与えるなどのことが起きれば、時として訴訟に発展することはあるでしょう。アメリカではそれに備える保険もあるほどです。しかし、援助者が訴える側になるとは、驚きでした。よほどに追い詰められた上での苦渋の選択であったと、同じ対人援助職としては、そう信じたい心境です。

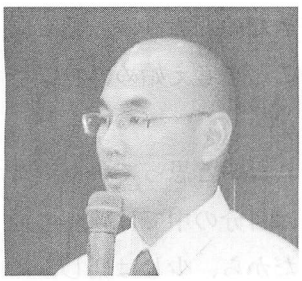
本来、援助は援助者と被援助者とのラポール（信頼関係）の上に存在しています。ソーシャルワークでは、インテーク（支援の導入段階）でラポールが結べなければ実際の援助関係には進みませんが、義務教育では、そうもいかないでしょう。教育の場と福祉の場という違いはあるものの、対岸の火事のように感じることはできません。

対人援助職も人であり、いつある一定の括りを持った対象者（この場合は、保護者との信頼関係を築けずに、保護者から追い詰められたと感じて苦しんでいるであろう教員）になるか分かりません。

援助者が被援助者に、援助者という立場を持ったまま被援助者にならなくて済むような、環境を作る必要があると思います。そして、援助者も「苦しいんだ」って言ってもいいってことを、援助者の共通認識にしたいですね。同じ対人援助者として援助関係が結びやすい現場になることを切望してやみません。

人間『教育者』との出会い

社団法人大分県社会福祉士会理事
別府大学　非常勤講師　明　石　二　郎



教育者とは

教育とは、今さら私が言うことでもないが、「教え、育む。」こと。それでは、いったい、何を「はぐくむ」のか。そんなことを考えてみてほしい。それは、教育者としての“願い”かもしれないし、“祈り”なのかもしれない。なぜなら、教育者にできることは、教えること、そして伝えること。それを、受け取り、心にきざみ、はぐくんでいくのは、これから向き合う“こども”たちなのだから。そう、だからこそ教育者は、全力を注ぎ、向き合うであろう“あらゆるこどもたち”に届くように、はぐくみの「糧」となるように、持てる専門的な技量と、そして心からあふれるエネルギーを活用する。

教育者との出会い

その心からあふれるエネルギーこそ、“こども”を信じる・・・いえ、“人間”を信じ、そして、こよなく愛そうとする人間の「心の力」なのではないだろうか。わたしは、多くのこどもたちに出会い氣づいた・・・大人に真剣に向き合って、話をきいてもらえていない、こどもたちが多いことに。大人に審判され続けている、こどもたちが多いことに。そして、夢や希望を熱く語れなくなっている大人たちが多いことに・・・。それは、教育者とて同じなのかもしれない。ある大学生が言った「今まで、いい先生に出会えなかったから。」。長い学生生活のなかで、一度もこどもの心に残る教育者との出会いがない・・・。いったい、教育者は、何を育むことを願っているのか。・・・もしかしたら、教育者も自分を保つことで精一杯なのかもしれない・・・

こどもたちの願い

教育者とは、診断者ではない。分析者でもなく、審判を下すものでもない。何度も言うが、教育者は「教え、育む。」専門職であると思う。そうあってほしいと願う。

こどもたちは、知っている。こどもたちは、感じている。あなたが、どのような教育者なのかを。その熱い「心の力」で、自分の中にある“はぐくみ”を信じ、願い、全力を尽くしてくれる、そんな「教育者」であり「人間」であるのかを。そして、こどもたちは、待っている。そんな、「あなた」との出会いを。

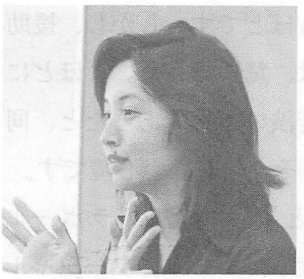
“願い”そして“祈り”

福祉現場に実習に行くことで、どのようなことを学び、または氣づくのか、それはわからない。ただ、人間や、人生や生命に直接触れることのできる福祉の現場は、人間の生きるという深くそして遠大なメッセージや氣づきを届けてくれるかもしれない。「教育者」として、教育という専門的技量を高めながら、と同時にその技量を使う「人間として生きる」という実践者であってほしいと願う。そして、“あらゆる人間”には“はぐくみ”の可能性があると信じ、願い、祈ることのできる、そんな「教育者」としての姿をとどけてくれたらなと、心から“願い”そして“祈り”たい。

「あなた」との出会いを待っている人がいる。

教職への道

からだの教室　Laugh
別府大学　非常勤相談員　阿部京子



教職課程を希望された学生の皆さんは様々な実習を無事終えられたことと思います。

介護等体験実習指導では、「特別支援教育」というまだまだ耳慣れない言葉で表される新しい障がい児教育の形について、実際に携わっている現場から、お話をさせていただきました。講義後のアンケートでは「不安だ」という声が多かったです。

個人的には、障がい児教育とは、普遍の教育の本質なのではないかと常々思っています。目に見える、または見えない障がいをもっている子どもたちに対して、何かを教え、彼らの力を引き出す教育という機会に接するにあたって、ちょっとした工夫や一風変わった視点を必要とする「特別支援教育」。本当はどの子どもにも必要な配慮であり、視点であり工夫なんです。障がいのない子だからといって放っておけば勝手に育つものでは決してないのです。

いつも、特別支援教育について、障がい児について、お話をさせていただく時にお願いすることですが、他の障がいのない子どもたちと同じように接してください、人間として当たり前に接してください、と言います。そうすると皆さんは一様に不安な顔をされます。「特別なこと」を聞きに来たのに、同じでいいとは何事かというような表情です。確かに戸惑われることと思います。けれど声高に、特別な支援を必要とする子どもには支援を、と言い続けると同時に、どの子にも同じような配慮を、と続けなければというこだわりを私は、抱え続けています。特別支援は特別扱いではありません。どの子どもにも「努力してやり遂げた」という充実感を得られるような課題の設定が必要なんです。そしてそれはどの子も少しずつ、違うのです。どの子どもも努力し、実践し、達成し、見守ってくれた大人とその瞬間を分かち合う喜びを感じるというプロセスは同じなんです。早さや難易度や、努力の仕方すべてが、それぞれ違うだけなんです。

自分の力だけでやり遂げることが大事な時期の子、誰かに助けてもらって、手伝ってもらうってなんか嬉しいなって感じることが大事な時期の子ども、ゆっくり丁寧に仕上げることが課題の子、という風に。

今の子どもたちは、早いことや力が強いことだけに価値観を見出しがちです。多分大人社会がお手本なので、教育の現場だけで修正のきくことではありません。

それでも、感受性の豊かな子どもの時期に、いろんな努力の仕方があるんだよ、と教えてくれる大人と出会うことはとても大切なことだと思います。いろんな価値観、多様な人間観を示すことのできる教職員になって、あなた方に関った子どもたちを、豊かな人間へと導いてください。

集団の中で、関り方に苦手さを持つ子どもたちと運動教室をしています。かれらと一緒にからだを動かして、人とのやりとりの心地よさを実感する体験をしてみませんか。迷ったらきてください。いつでも歓迎です。